

【旧約聖書日課】ゼカリヤ書 2章14～17節

- 14 娘シオンよ、声をあげて喜べ。
わたしは来て
あなたのただ中に住まう、と主は言われる。
- 15 その日、多くの国々は主に帰依して
わたしの民となり
わたしはあなたのただ中に住まう。
こうして、あなたは万軍の主がわたしを
あなたに遣わされたことを知るようになる。
- 16 主は聖なる地の領地として
ユダを譲り受け
エルサレムを再び選ばれる。
- 17 すべて肉なる者よ、主の御前に黙せ。
主はその聖なる住まいから立ち上がられる。」

【福音書日課】ルカによる福音書 1章57～66節

⁵⁷さて、月が満ちて、エリサベトは男の子を産んだ。⁵⁸近所の人々や親類は、主がエリサベトを大いに慈しまれたと聞いて喜び合った。⁵⁹八日目に、その子に割礼を施すために来た人々は、父の名を取ってザカリアと名付けようとした。⁶⁰ところが、母は、「いいえ、名はヨハネとしなければなりません」と言った。⁶¹しかし人々は、「あなたの親類には、そういう名の付いた人はだれもない」と言い、⁶²父親に、「この子に何と名を付けたいか」と手振りで尋ねた。⁶³父親は字を書く板を出させて、「この子の名はヨハネ」と書いたので、人々は皆驚いた。⁶⁴すると、たちまちザカリアは口が開き、舌がほどけ、神を賛美し始めた。⁶⁵近所の人々は皆恐れを感じた。そして、このことすべてが、ユダヤの山里中で話題になった。⁶⁶聞いた人々は皆これを心に留め、「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」と言った。この子には主の力が及んでいたのである。

神の御子がお生まれです！【こども説教のために】

アドヴェントの第四のロウソクに火が灯り、あわせて五本目の「降誕のロウソク」にも火を灯しました。今日は12月24日、日が暮れると「クリスマスイブ」、御子のご降誕を祝うときを迎えます。そのときを待たずに、わたしたちは、この日曜日の朝の礼拝を「降誕祭」を祝う主日礼拝として集まりました。

気が早いと言う人があるかもしれません。けれども、わたしたちはすでに三週間、アドヴェントのロウソクと共に、ご降誕を祝うための備えをしてきたのです。その間、アドヴェントのロウソクが灯る中で、クリスマスの天使たちが、御子のお生まれを告げてくれたのです。

先週の日曜日の午後、子どもたちにも奉仕してもらって「降誕劇礼拝（ページェント礼拝）」をささげました。降誕の物語を告げる聖書の朗読を聞き、キャロルの賛美を歌い、衣装を着けた奉仕者が物語を演じました。大人の人たちも大勢、加わってくれました。大人の人たちにとっては、衣装を着けた子どもたちが礼拝の中心にいるというだけで、うれしい気持ちになったかもしれません。普段の礼拝では、子どもたちが真ん中にいるのは「こども説教」のときだけだからです。

でも、特に大人の人たちには言っておかなければなりません。「降誕劇礼拝」で子どもたちが衣装を着けて真ん中で演じたのは、誰かに見てもらうためではないのです。礼拝で皆が、御子のご降誕の物語を本当に心に留め、お生まれくださる御子をお心からお迎えすることができるようになるために、礼拝の真ん中に立って演じたのです。だから、本当は、大人の人も皆、衣装を着て真ん中で演じたり、聖書朗読の奉仕をしてほしかったのです。皆が、御子のご降誕の出来事をしっかりと心に留めるためには、そうするのが一番良いからです。「降誕劇礼拝」をするのは、そのためだからです。

そのことを知っている人は、真ん中で皆の前に立ちました。そのことをまだ知らない人のために、クリスマスの天使となってくれたのです。天使の役の者だけでなく、「降誕劇礼拝」で何かの奉仕をしてくれた人は皆、クリスマスの天使となって、御子のお生まれを告げてくれたのです。わたしたちが、子どもも大人も皆、御子のご降誕を祝うことができるように、と。

今日、ここに集められてきたのは、クリスマスの天使たちに導かれてきた一人ひとりです。大勢が集められてきました。そうです、神の御子がお生まれなのです。今日は、ご降誕の祝いです。天使たちは、よい役割を果たしました。さあ、立って、クリスマスの挨拶を交わしましょう。

天使は告げる

このご降誕を祝う礼拝に、わたしたちは、特別な贈り物をいただいています。洗礼志願者です。この後、洗礼式を執り行うことになるでしょう。

わたしが牧師としてクリスマスの祝いの礼拝の中で洗礼式を執り行うのは、八年ぶりです。石神井教会に仕えるようになってからは、初めてです。前任地教会では、クリスマスにはほぼ毎年、受洗者がいて、洗礼式を執り行っていました。石神井教会では、受洗者はいても、クリスマスではない機会に洗礼式を執り行ってきました。八年目の今年、ようやくクリスマスに受洗者を迎えることになりました。今年、特別なクリスマスの天使が、わたしたちのところに来てくれていたようです。

クリスマスの天使の一人は、「ガブリエル」です。天使ガブリエルは、御子の母マリアに、御子のお生まれを告げていました。マリアは、天使の言葉に戸惑いながらも、「お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカ 1:38）と答えて、御子のお生まれに備え始めました。

同じように、天使ガブリエルから男の子の誕生を告げられて、男の子の誕生に備えた人がいました。年老いた祭司のザカリアです。妻エリサベトも高齢でしたが、ある日、ザカリアが神殿で祭司の務めに就いていると、天使ガブリエルが現れて、妻エリサベトに男の子が生まれる、と告げたのです。ザカリアは、恐ろしくなって天使の言葉を信じることができませんでした。それでも、エリサベトが身ごもると、天使が告げたとおり生まれてくる子を迎えるために、備えを始めたことでしょう。何よりも、生まれてくる子のために、命名の準備を始めたのです。エリサベトが男の子を産んだとき、周りの人々は、父親と同じ「ザカリア」の名を付けるように勧めました。けれども、ザカリアとエリサベトは、その子に付ける名を決めていました。「**この子の名はヨハネ**」。周りの人たちは驚きましたが、二人は、譲りませんでした。それは、あの天使ガブリエルが与えてくれていた名だったからです。

御子のお生まれを告げる天使は、わたしたちの間で新しく生まれる命に、名を与えてくれています。それは、神がお呼びくださる名です。

クリスマスの天使に導かれて御子のご降誕の祝いへと進み入ってきました。わたしたちは、耳を澄ませましょう。その天使は、わたしたちの中に新しい命が生まれると告げていたはずです。わたしたちの中の新しい命に、新しい名を与えてくれていたはずです。神に呼ばれる名です。御子と共に神の子として名を呼ばれるのです。

神の御子がお生まれです。わたしたちも、新しく生まれるでしょう。神に名を呼ばれる者として、新しく生まれるでしょう。

この子はどんな人？

神の御子がお生まれになったのは、わたしたちが新しく生まれるためです。毎年の降誕祭に神の御子のお生まれを祝うのは、わたしたちの中に新しく生まれる者が与えられるため、そして、わたしたちが年ごとに新しく生まれ直すためです。

わたしが洗礼を受けたのは、高校二年生のクリスマスです。その日、神の御子と共に新しく生まれました。とは言っても、そのとき、自分にそのような自覚があったわけではありません。両親が信者、祖母二人も信者、曾祖母の一人も信者という家庭で育ち、姉と兄が高校二年生で洗礼を受けていました。今でも鮮明に覚えています、高校二年生の秋の日曜日、教会からの帰り際に牧師に呼び止められ、「お兄さんは高校二年生のときだったけど、実基君はどうですか」とだけ言われて、うっかり、「はい、僕もそう思っています」と答えてしまったのです。準備会も何もありませんでしたが、一度だけ、牧師に呼ばれて二人だけで話をしました。「君は、クリスチャンの家庭で育ったから、何も言う必要はない。神さまのことをどう考えているか、聞かせてほしい」とだけ言われ、偉そうに持論を述べたことは覚えています。言い訳するわけではありませんが、両親から信仰のことで具体的に教えられたことは何もありませんでした。ただ、生まれる前から教会の交わりに放り込まれてきたのです。多くの同世代の仲間がいる教会でした。一緒に教会活動をし、喧嘩もたくさんしました。洗礼を受ける前から、教会は自分の属するところでしたから、洗礼を受けたからといって何かが変わるとは思っていませんでした。「新しく生まれる」などと、少しも考えていませんでした。

残念ながら、人は、自分が生まれるときには、ほとんど自覚がないようです。けれども、それが良いのかもしれませんが。この世に生まれ出てくることは、確かに大変なことなのです。母の胎にいたときには、へその緒を通してすべてを母体に任せていればよかったのに、生まれ出た途端、自分の鼻で呼吸をし、自分の口で食べ、自分の手足で何事でも為さなければいけなくなるのです。知っていたら、母の胎に留まろうとしたかもしれません。それでも、人は、生まれ出てくるのです。新しく生まれるのです。一人の人として立ち、生き、為すべきことがあるからです。

「いったい、この子はどんな人になるのだろうか」。

神の御子と共に新しく生まれた者は、神の御子と共に立つ人となるでしょう。神の子として一人立ち、神の子として人と世に仕える者となるでしょう。そうなるために、神の御子がお生まれくださったのです。

御子のお生まれを祝いましょう。新しく生まれる者を祝いましょう。